
城崎明音の推理

高城西獅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

城崎明音の推理

【Zコード】

Z3827Z

【作者名】

高城西獅

【あらすじ】

投稿の速度は遅いかもしませんが、読んでいただけると嬉しいです

プロローグ（1）

彼女に出会ったのは、秋の日の夕焼けが恐ろしく綺麗な日だった。界隈の家々や木々や電柱はその全てが金色に染まり、正直、この世の終わりでも来たのかというような美しさだった。

その時の私は、ちょっととした飲み会があつて、その会場へ行くためのバス停へ向かうところだったのだが、それで思わず立ち止ってしまった。バスの時間は気にかかつたが、産まれてからの21年、こんな夕方の風景は一度も見たことがなかつたので、しばし呆然とした時間を過ごした。

長く眺めていると、もうひとつ不思議なことが分かつた。西の空は鮮やかな金色なのだが、東の方向へ目を移していくにつれ、空は徐々に暗いトーンへと変貌し、鮮やかな紫色なのである。金色の空と紫の空が同じ時間に、同じ空に同居している。それはちょっとと形容し難い、神秘的な空間だった。

私は放心して、その空を見上げた。

その時だった。急にこの空間に似つかわしくない、犬のけたたましい泣き声が聞こえてきた。

私は折角の貴重な時間を邪魔されたことに内心で苛立ちながら、その方向に目を移した。

住宅街の向こうの細い道路から、ベージュのダッフルコートに身を包んだ、おそらく私と然程年齢は変わらないだろうと思われる人の女性が、甚だしく狼狽してこちらへ走つてくるのが見えた。

そのすぐ後ろを何か小さな動物が走っている。先ほどからの泣き声は、どうやらこの犬らしい。

最近流行のトイプードルだろうか。首輪がされている。リードを握っているのは、無論、先を走っている女性である。何事か分からぬのだが、犬は後ろへ向かって懸命に吠え立て、リードを握る女性は一心不乱にこちらへ走つてくる。

しかし、すぐにその理由は分かつた。

追われているのである。最初、それに気付いた時には、私は噴き出しそうになつた。彼女たちを追つているのは、猫だつた。

白と茶色の縞模様の猫で、「シャーツ」と物凄い形相で、何度もトイプードルに攻撃を仕掛けながら、またすぐに一定の距離をとつて、執拗に追い立てている。

猫に追われている犬、そして、その犬のリードを握つて逃げ惑う女性。

先ほどまで見ていた優美で幻想的な空と、少しも釣り合わない滑稽な状況に、私はお腹を抱えて笑い出しそうになるのを必死に堪えた。

でも、追われている女性と犬の表情は真面目そのものである。女性が私の姿を見留めて

「お願い、たすけてー」

と、悲鳴に似た声を上げた。

可笑しくて、しばらく見ておこうかと思ったのだが、それでさすがに可哀想になつて、手伝つてあげることにした。

私は、彼女たちが私のそばまで逃げてきたのを見計らつて、猫に蹴りを食らわせた。

猫は後ろざまに飛び跳ねて、その私の攻撃をかわす。

ここまでは、想定内。異変はその後に起こつた。

一瞬ひるんだ猫に、これぞ好機と思ったものか、トイプードルが猫に攻撃を仕掛けたのである。猫はすばやく攻撃をかわし、私の足の周りを旋回した。それを追うトイプードル。そのおかげで、あつという間に私の足は、トイプードルのリードで縛られてしまつた。私は足の自由が利かなくなつて、前につんのめつてこけそうになつた。その時、予想もしていなかつた、最後の一撃が来た。

追いつきそうになつて、猫にいよいよ噛み付こうと口を開いたトイプードルの牙が、すんでのところで猫にかわされ、その牙が私の足に喰らいついたのである。

「痛つてーーー！」

大声を上げて、ついに私はすっ転んでしまった。その拍子に、猫はサッと近くの堀に飛び乗り、あつという間にその向こうへと姿を消した。トイプードルはなおも興奮して、ワンワンと激しくそちらを吠え立てている。

私はかたわらでわめき散らかすトイプードルを、思い切り殴りつけたい衝動に駆られた。だが、自分の犬でもないし、飼い主がそばにいるのでそうも行かない。

すると、当の飼い主がひどく狼狽した様子で

「ごめんなさい、大丈夫ですか？」

心配そうな声を上げ、私の傍らにしゃがみこんできた。

「あ、ああ、大丈夫だよ」

私は笑顔で言つた。先ほどから薄々気付いていたのだが、その女性はかなり私の好みのタイプだった。無理に格好をつけて、気安い声を出してみた。

しかし、噛まれた部分は意外にズキズキとしている。

「ちょっと、ごめんなさい」

彼女はそう言つなり、私の噛まれた部分のズボンを捲くり上げた。靴下に血がにじんでいた。彼女はその靴下をも下ろした。

内心、私はビックリした。この女性、どうやらかなり大胆な性格らしい。こんな状況になつたとは言え、なかなか初対面の異性にここまで堂々とした対応はとれない。

しかし、彼女はそんな私の内心の動搖に気付く風もなく

「たいへん！」

と、大声で叫んで、私を見た。

その上目遣いが私をドキリとさせる。細面の白い顔が、心配そうに曇つている。おかげで痛みはまるでマヒしてしまった。

傷に目をやると、確かに、犬歯の後なのか、綺麗に二つ穴が開いていて血が出ていた。血は多少ショックだったが、私の見たところ、そう気にするようなものでもない。

「大丈夫だから、とりあえずリードをほどいてくれる？」「私がそう言うと、彼女は小さく「あつ」と叫んで「じめんなさ～い」

と、胸の辺りまで垂れ下がった髪を揺らしながら、一旦、首輪からリードを外し、素早くリードだけを私の足からするりと抜き取つてくれた。手際の良さとは裏腹に、表情は恥ずかしそうにモジモジとしている。それがまた可愛い。

こういう時、同じ年頃の男なら、キッカケとして使うのだろうが、私はその点まるでダメである。

「ありがとう」

と、お礼を言つて立ち上がると、膝とお尻の汚れをはたいて、彼女に背を向け、バス停へと歩き始めた。

すると、意外なことが起きた。

彼女が私の前に回りこんで、「ダメです」と、手を広げたのである。

「え？ 何が…？？」

「だつて、怪我してるじゃないですかー！ 病院へ行きましょう。私が付き添いますから」

「いや、大した事ないよ。普通に歩けるし」

「ダメですって、血も出てるし」

「これくらい平氣だよ。あとでカットバンでも貼つておくから」「えー、でも何かの菌が入つて腫れたりしたら…」

彼女が困ったような表情で私を見つめた。

「あ、じゃあ、せめてウチへ来てください」

何か思いついたように、彼女が続ける。

「とりあえず、消毒だけでもさせてください。カットバンもありますから」

「うーん」

私は思案した。実はさつき血を見た時から、（ジーンズに血がついたら嫌だな～？）と、貧乏たらしき悩みが頭をもたげていたので

ある。

結局、私は彼女の言葉に従つてこじつた。

飲み会に行くのはやめにした。

プロローグ（2）（前書き）

続きです。良かったら読んで下せー。

プロローグ（2）

案内されたのは、路地裏にある一軒の喫茶店だった。

思わず「あ！」と、声が出た。

彼女が耳聴くそれを聞きとめて

「来たことがありますか？」

と、嬉しそうな笑顔で振り返った。

私に怪我を負わせた間抜けなトイプードルは、既に歩くことをやめ、彼女の胸に抱きかかえられている。あまり歩きたがらない犬のようだ。それとも、さつきの猫との戦いで疲労困憊したものだろうか。

「ああ、以前に何度か」

私は曖昧に答えた。

「そうなんですかー。どうでした？」

「ああ…。確か、コーヒーとホットケーキが美味しかったよね…」
数年前、高校時代の思い出が蘇ってきた。この店は、当時付き合つてた女性に何度か連れられて来られた喫茶店だ。

今はもう会うことのかなわないその人との記憶が、ふつと昨日の出来事のように去来する。あれ以来、ここには来た事がない。妙な縁だ。

彼女は店に入らず、その脇の路地を裏手に回つて行つた。途中潜り戸があり、彼女はその奥へと入つて行つた。私もそれに続く。潜り戸の向こうの店の裏部分は、店舗部分の瀟洒な佇まいに似合わず、こじんまりした和風の縁側になつていた。敷地には庭木がいくつも植えられていて、紅葉がちょうど鮮やかに赤く染まっている。四季ごとに、この縁側から季節の移ろいが見られるようになつているのかも知れない。

彼女はその縁側の掃き出し窓を開け、私にそこへ座つておくよう促して、アホ犬を抱えたまま廊下を奥へと走つていった。

私がお言葉に甘えて、そこにぼんやりと座していると、程なく彼女がアホ犬を救急箱に抱き代えて戻ってきた。

アホ犬は彼女の遙か後方で私の方を見て、「ワンワン」と泣き叫んでいる。

愛する主人が自分を置いて、見たこともない人間の方へ行つたことに嫉妬しているのだろう。ちょっとといい気味だ。

そのアホ犬がどうしたものかと、その辺をウロウロしている間に、彼女の治療は終わつた。

久しぶりのオキシドールが随分しみたが、この刺激が効いてるなあという気持になるのは、子供の頃から変わらぬ錯覚かもしれない。ひとつおりの仕事が終わつて、「そういえば」と彼女が口を開いた。

「もしかしたら、どこかへ行こうとなさつてたんですか？」

「え、ああ…」

私は一瞬言葉に詰まつたが、何だか急に可笑しくなつて、たまらず吹き出してしまつた。

「どうしたんですか？」

と、怪訝な表情の彼女。

「いや、別に散歩中だつただけだよ」

私は本当のことは言わず、笑いを何とかおさめた。

さつき、私がバス停に行こうとするのを半ば強引に遮つたくせに、今頃そこに思いを廻らせた彼女の思考に、何とも言えない愉快な気分になつた。

彼女は僅かの間、私の笑いにちょっと不満げな顔をしていたが、

「あ、私、名前を言つてなかつたですよね？」

と、話題を切り替えた。

「私、城崎明音きのさきあかねつていいます」

突然の自己紹介である。ちょっと意表を突かれたが、すぐにその名を脳味噌の皺ましまそづけへと刻み込んだ。

「ああ、僕は真島蒼介ましまそうけ…あの…なんて呼べばいいのか分からぬ

けど… 明音ちゃんでいい？」

「はい、好きに呼んで下さい」

屈託のない笑顔である。表情が豊かで、見ていて飽きが来ない。

「明音ちゃんはこここの娘さんなの？」

「はい。この喫茶店は私のお母さんがやつてるんです」

「へえー」

「私、ここで手伝いしてるんですけど。真島さん…って、最近も来られましたあ？」

「いや、来てたのは学生時代なんだ。もう2年くらいは来てないかなあ…」

私は思い出しながら言った。

「あ、そなんですかー。さつき褒めてくださったホットケーキ、今は私が焼いてるんですよ。良かつたらまた食べに来てくださいね」

「ああ、そうだね。是非食べに来るよ」

そこまで言つて、私はさつきから気にかかつていていた事を言葉にしようつと口を開いた。

「明音ちゃんって、何歳？お姉さんか、妹がいない？」

「私、19です。姉も妹もいますけど…」

明音がそこまで言つた時、庭先の方から

「あ、お客さん？」

と、別の声が聞こえてきた。

声の方向を見ると、セミロングのストレートヘアの一人の女子高生が庭先に立つていた。目が大きくて頬が少しがふつくらとした童顔なのだが、体型はモデルのように入リムで、完全なる美少女だ。

「おかえり、ゆりあ

明音が応えた。

「散歩中に、パンクがこの方に噛み付いちやつて、傷の消毒をさせてもらつてたところ。真島蒼介さん」

紹介されて、軽く会釈をする私。

しかし、私の静かなる会釈は彼女の大声にかき消された。

「えー、パンクが噛み付いたのー？ほんとにー！？ヤバいんじゃないの？…あつ、どうも、すいませーん！」

ゆりあと呼ばれた女子高生は一気に言つて、私にペコリと頭を下げた。

「普段はそんなことする「じやないんですけど…」

尚も言い訳めいた事をぶつぶつと喋るゆりあ。

「いや、全然大したことはないんだけど…。あのワンちゃん、パンクつていう名前なんだね？」

私は一人の会話で、やつとあのアホ犬の名が「パンク」だと知った。飼い主が一人の美少女ということもあり、さすがに「アホ犬」とは呼べない。嫌々ではあつたが「ワンちゃん」と言つてみた。「そりなんです、トイプードルつていう種類の犬なんですけど。…可愛いでしょ？」

明音は当の可愛い犬が、私の足に噛み付いたことを既に忘れているのか、嬉しそうに言つた。本当に悪意のまるでない、手放しの笑顔である。

「真島さんつて…」

ゆりあが私の傍らで、縁側から家に上がるべく、靴を脱ぎながら言つた。

「…色男ですね」

脈絡がない突然の発言に、ビックリした。

明音が慌てふためいたように、怒声をあげる。

「もう、何言つてるのあんた！」

私も何と言つていいのか、返事に詰まつて、ただ笑つてみた。

最近の女子高生って、こうなのだろうか？驚いたが、「色男」と言われて悪い気はしない。それともからかわれているものか…。

「すいません！あ、まだ言つてなかつたですよね？これ、私の妹でゆりあつています」

弱りきつた表情で明音が言つた。本当にこの表情の変化は面白い。

「いいじゃん、褒めてるんだから。ねえ？」

口元に含み笑いを浮かべて、ゆりあが私の方を見る。姉の判り易い反応と違い、こつちはどこまで本気なのか、ちょっとと判断がつかない。

「えつと、ゆりあちゃんが妹って事は、お姉さんもいるんだね？」
私はこの話題から離れようと思つて、さつきの話を持ち返した。

「あ、いますよ。もうすぐ帰つてくると思つんですけど」

「名前は城崎愛李さん？」

「えー、何で知つてるんですか！？」

明音とゆりあが異口同音に、驚きの声を上げた。ゆりあは隣の部屋まで行きかけていたのだが、また戻ってきた。

「やっぱりそうか。高校時代の同級生なんだ。でも、同じクラスにはなつたことがなかつたから、愛李さんは僕のことを知らないと思うけどね」

当時が思い出されてくる。

私が以前付き合つていた女性は高校の同級生で片瀬真那かたせまなといった。この長女の城崎愛李と真那は大親友で、真那がこの喫茶店に何度か私を誘つて来たのもそのためだつた。愛李は当時、自宅であるこの喫茶店でアルバイトしていて、私と真那が来ると必ずオーダーを取りに来てくれた。でも、仕事は真面目にこなすタイプの口のようで、喫茶店内では真那ともほんの少し言葉を交わす程度だつたから、私が愛李と話をしたことはたぶん一度も無かつたと思う。

そして、ある日を境に私は真那と会えなくなり、むりん愛李のいるこの喫茶店にも通うことは無くなつた。

「さてと、血も止まつたみたいだし、もう帰るね。治療、ありがと

う

私は思い出を振り払つよつて立ち上がつた。

「あーもう少し休んで行つたら、どうですか？」

「そうだよ、リンももうすぐ帰つてくるだろ？」

「どうやら、愛李は妹たちに「リン」と呼ばれているよつだ。

「愛李さんは、今は喫茶店の仕事はしてないの？」

「はい、近所の会社で事務の仕事やつてるんです」

「へえー、そうか。じゃ、よろしく言つておいてね。たぶん彼女は僕のことを知らないと思つけど」

私は冗談めかしてそう言つて、さつき通つてきた往来へ出る潜り戸の方へ歩いていった。

明音が慌てて、ついて来てくれた。ゆりあもさつき靴を脱いで縁側へ上がつたばかりだいのに、また靴を履いて降りてきた。

余りのサービスの良さに恐縮しながら、最後にもう一回「じゃあ」と言つて、潜り戸に手を掛けた時、不意に潜り戸が向こう側から何者かによつて開けられた。

「わっ！」

ビックリして、私が後ろへ飛び下がる。

すると、向こうから潜り戸を開けた女性も、戸から半ば顔を出して、驚いたように動きを止めた。目を大きく見開いて、中を窺つている。

見覚えのある漆黒のロングヘアだった。城崎愛季だ。

「あ……」

先に愛季が声を出した。明らかに私のことを覚えているような表情だった。

「…ひさしぶり」

本当に覚えているかどうかは分からぬが、私は博打のつもりで言つてみた。

果たして彼女は覚えていたようだった。

「どうしたの…？久しぶり…」

もともと背が低くて童顔だった彼女だが、それは当時と変わらないのに、今は綺麗な黒髪が複雑にカールしていて、チャコールのコートも相俟つてすごく大人びて見える。

後ろから、明音が全てを説明してくれた。それで最初は訳が分からぬといつような表情だった愛季も、納得したようだった。

「傷、大丈夫？」

「うん、平気。また喫茶店の方にでも顔を出すよ」

「あ、うん。また来てください」

何となくお互に『めい』かないやつとりになる。それで私は早々にそこから辞去した。

また来るのは言つたものの、本当は来るつもりはなかつた。

それでも数日後には何度もここへ足を運ぶようになるのだから、

人生といつのは分からぬ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3827z/>

城崎明音の推理

2011年12月16日22時56分発行